

## 希望をつなぐ

### 酒井 晶代

昨年読んだ本のなかで最も感銘を受けたのは、黒岩比佐子『パンとペンー社会主義者・堺利彦と「売文社」の闘い』（講談社 一〇月）である。堺利彦と児童文学？ と首をかしげる方がおられるかも知れないが、小説家志望だった青年期の堺は巖谷小波と接点があり、雑誌『少年世界』に堺枯川の筆名で作品も書いているので、あながち無関係ではない。しかし本書が焦点をあてるのは、平民社を創設した社会主義者としての堺でもなければ、小説家としての堺でもない。明治末から大正の社会主義運動の弾圧期、「冬の時代」と総称される時代に彼が興した「売文社」という組織の主宰者としての姿である。同社は現在の編集プロダクションや広告代理店の先駆であり、堺たちは語学力や文才

を生かして幅広く（右から左まで！ 学生から政治家まで！）翻訳や文筆を請け負い、糊口をしのいだ。冬の時代に「暗闇のなかで、唯一消えずに残った小さな灯火」であった売文社とそこに集った人々、そしてその中心で「怒りや苦悩をユーモラスな言葉の裏側に隠し」「ひたすら時機を待ち続けた」堺利彦の軌跡を記したずしりと重い評伝である。

本書は児童文学の研究書ではないが、ぜひふれておきたかった。というのも、本誌でも繰り返しとりあげられてきた大阪国際児童文学館をめぐる一連の出来事をはじめ、昨年末に可決された東京都青少年健全育成条例改正案など、ここ数年の子どもの文学・子どもの文化をめぐる動きに明るい兆しを見つけることがなかなか容易でないからだ。厳しい時代にどのように希望をつなぐのか。「暗闇のなかの灯火」はどこにあるのか。あくまで管見の範囲であるが、研究・評論の動向を追いながら探ってみたい。

近代児童文学史や作家研究としては、西田良子『宮沢賢治読者論』（翰林書房 三月）がある。著者の半世紀を越える賢治研究の集大成というべき一冊で、初出は五四年のものから〇九年のものまで幅広いが、いずれも平易な文章で読みやすい。国柱会の日刊新聞「天業民報」等の一次資料を丁寧に検証し、通説の見直しを迫った画期的な論文も収める。賢治関連ではこのほかに、『宮澤賢治イーハトヴ学事典』（弘文堂 一二月）も刊行された。「序」には「これま